

20世紀英米文学案内 18

T. S. Eliot

エリオット

平井正穂 編

KENKYUSHA

20 世紀英米文学案内 18

エリオット

1967 年 1 月 20 日 初版発行

1975 年 10 月 15 日 3 版発行

編 者 平 井 正 穂

発行者 小酒井貞一郎

印刷者 小酒井益三郎

発行所 研究社出版株式会社

162 東京都新宿区神楽坂 1 の 2

電話 東京 (269) 4521-5 番

振替口座 東京 83761 番

印刷 研究社印刷

美術印刷 大平舎

製本 新栄社製本

製函 加藤製函所

(落丁・乱丁本はお取りかえします)

1398-105018-1860

目 次

人 と 生 涯 / 平井正穂	1
----------------	---

作 品

『プルーフロックとその他の観察』 / 山内久明	28
-------------------------	----

『詩集』 / 山内久明	37
-------------	----

『荒地』 / 山内久明	45
-------------	----

『うつろな人々』 / 玉泉八州男	59
------------------	----

『聖灰水曜日』 / 玉泉八州男	62
-----------------	----

『エアリアル詩集』 / 玉泉八州男	68
-------------------	----

『四つの四重奏』 / 安田章一郎	75
------------------	----

詩 劇 / 中野里皓史	115
『寺院の殺人』『一族再会』『カクテル・パーティ』 『秘書』『長老政治家』	
文芸評論 / 磯田光一	149
「伝統と個人の才能」「詩の効用と批評の効用」「ダン テ」「シェイクスピアとセネカのストイシズム」ほか	
文化評論 / 矢本貞幹	187
『キリスト教社会の理念』『文化の定義のための覚え書』	
評 価 / 二宮尊道	213
年表・書誌 / 平井正穂・河村錠一郎・高野秀国	卷末 1
書誌追加	卷末 34
索 引	卷末 35

人と生涯

アメリカとイギリス

アメリカ人として生まれ、イギリス人として死んでいったエリオットの生涯を、今われわれが思いうかべるとき、そこに現われてくる多くの問題のうち、エリオットにおけるアメリカ的なものとイギリス的なものとの相關関係の意味ということもその一つに、しかもかなり重要な一つになるように、私には感じられる。

ヘンリー・ジエイムズ (Henry James) やヘンリー・アダムズ (Henry Adams) などを含めてアメリカの文人たちがなぜあのようにヨーロッパへ強く心を惹かれていったかという、一つの大きな文化的現象の一例として、大きな文脈においてこのことを論ずることも可能かもしれない。しかし、また、そういう大きな文脈を片方では捨てないで、もっと個人的な、もっと内的な体験に即した文脈においてエリオットにおけるこれらの二つのものもつ関係の意味をさぐることも重要だろうと思う。どの作家にしてもそうであろうが、ある人間の「人と生涯」を叙述するさいには、時間と空

間という二つの要因を軸として作業をいとなまなければならぬのは平凡といえれば平凡な、公式的な仕事であらう。ただ、エリオットの場合には、時間と空間という、平凡な、散文的な、下手をすると余りにも公式的なものに墮してしまふ危険のあるものが、じつに彼の文学の、——詩と評論と劇の——根底に流れている基本的な主題につながるものであることを考えると、これらの要因のもつ重要性、その陰翳はとくに注意されなくてはならない。「いま、そして、ここで」 ("now and here") という彼のしばしば繰り返す言葉が暗示するように、時間と空間、ときとところ、彼の生涯を通じ、彼のすべての作品・評論になんらかの形でその微妙な影をおとしてきているのである。

時間の問題はあとでふれなければならないが、今、私は彼の人と生涯をのべるに当たって、彼の空間的意識とでもいいものに、まず心を惹かれる。場所の意識が彼につねに熾烈であったこと、このことは否定できない。そのことについてもうわしく後で述べたい。ただ、今、いつておきたいことは、一九一四年にイギリスに定住して以来、時おり講演旅行その他でア

メリカに帰ったが、その一生の大半をイギリス国民（二九二七年にはイギリスに帰化している）としてくらしただにもかかわらず、そして、「彼ほどイギリス的な人間もなかった、おそらくイギリス人以上にイギリス的であつた、という事実にもかかわらず、私には、彼の中に

アメリカ的なものが根強く、さまざまな形において残つていたと考える。私は、彼が直面したいろんな困難な問題が、彼の内部におけるアメリカ的性格を強調することによつて、その妥当な解釈ができる、と言おうとしているのではない。ただ、そのような性格を無視することの危険を意識していたい、と言っているのだ。彼の「人と生涯」は、外面的には実に平凡であるが、内面的には非常に複雑なものであつたと思う。そこに彼の魅力も、そしてわれわれに対する意義もある。エリオットという一個の人間を見ていると、アメリカとイギリスという二つの性格が交錯してわれわれの眼に映り、そしてまた、そのようなアングロ・サクソンのものはヨーロッパ、とくにラテンのヨーロッパの精神風土と深いつながりをもつて現われてくるし、そしてさらに、そのような彼の内的状況はアジア

的な精神風土とも実に微妙なかかわり合いをもつて現われてくるのである。重層的な意識がそこにあつたと思う。

彼はかつて（二九二八年）、自分はいつてもアメリカにおいて「南西部地方にあつてはニュー・イングランド人であり、ニュー・イングランドにあつては南西部人であつた」と言つたことがある。私はこの言葉との類推によつて、エリオットは、アメリカにあつてはイギリス人であり、イギリスにあつてはアメリカ人であつた、と言いたいのである。そしてこの類推は、ある程度までは、その文脈を空間的に拡大してゆくこともできる。私は、いつも、このことに関連して、ロレンス（D. H. Lawrence）をめぐるエリオットとリーヴィス（F. R. Leavis）の間の意見の衝突を思い出すのであるが、リーヴィスは、エリオットがイギリスの文化・文明について無知であることを糾弾した。リーヴィスの口調は、明らかにエリオットを異国人として眺めていることを示していた。多少ニュアンスの違いはあるが、マードック（T. S. Murdoch）がかつてエリオットにはイギリス非国教派の伝統に対して共感がないとい

うことを指摘したことも私は思い出す。われわれから見れば、生粋のイギリス人でないために、そのような批判を受ける可能性があったかもしれないと思うが、それと同時に、それゆえに、鮮明に抽出された形でエリオットの観点からするイギリスの諸性格がわれわれに示されたし、また、それゆえに、イギリス的風土をこえてヨーロッパ的、さらに世界的な精神へ志向しようとする一つの流れが示された、ということもできる。

セント・ルイス

トマス・スターンズ・エリオット (Thomas Stearns Eliot) は一八八八年九月二六日、ミズーリ州セント・ルイス (St Louis) に生まれた。ミシシッピ河にのぞむこの「南西部」の都市とエリオットとの結びつきは、『荒地』(The Waste Land) やイギリスの上流や中産階級の人々を扱ういくつかの詩劇、また都雅な文化を唱える評論の作者をのみわれわれが考えるとき、一見奇異な感しをあたえる。けれども、『四つの四重奏』(Four

Quartets) 中の「ザ・ドライ・サルヴェイェス」(The Dry Salvages) に出てくる大河のイメージは明らかにミシシッピのそれであり、幼少の頃になれたしんだものか幽玄な象徴性をまとうて表現されたものである。「時間は」と彼はそこで書いている、「河に似ている、死んだ黒ん坊を流してゆく河に」。時間、破壊的な力、流れ、河、黒ん坊の死体、——といった一連の心象の背景にミシシッピ河が意味深く横たわっている。想念の展開か、その重要な点において、はっとするような過去の体験に即する具體的な心象をとりこむことによって驚嘆すべき意味の強さを示すのは、エリオットの詩の特色を示すパターンである。

エリオットの父ヘンリー・ウェア・エリオット (Henry Ware Eliot) は敏腕な実業家で、母シャーロット (Charlotte) は文学的才能の豊かな女性であった。この両親のそれぞれの才能はたしかに詩人エリオットの血の中に流れていたようである。彼が後年ロンドンのロイド銀行 (Lloyd's Bank) の行員となったこと、そして、いわゆる「市」筋の実業家的な風貌と才

能を示したことが、文学的才能よりもむしろ、彼をフエイバー・アンド・ガイアー (Faber and Gwyer. のちのフエイバー・アンド・フエイバー Faber and Faber) 社の社員たらしめたといえようが、彼の経営や編集上の実務的な手腕は父親ゆずりのものであったようである。母の書いた劇詩『サヴォナローラ』(Savonarola) はエリオットの序文をつけて一九二六年に公けにされたが、彼女が、少年時代の彼になんらかの形で文学的なものを伝えたであろうことは否定できない。しかし、両親のことを問題にするとき、彼らがニュー・イングランドからこの南西部に移住してきた人々の血をひいていることも注意されなくてはならない。とくにエリオットの父方の祖父ウィリアム・グリーンリーフ・エリオット (William Greenleaf Eliot) がハーヴァードの神学科を出てセント・ルイスに移住し、ユニテリアン派の教会の牧師、そして一八五三年に同市にワシントン大学を創立したことは特記する必要がある。この祖父がドイツ哲学に傾倒し、ユニテリアンとして教会活動・公共活動に献身的に努力したことは、これまた詩人・批評家としてのエリオットに影響をあたえた

にちがいない。後年(一九五三年六月)、エリオットはワシントン大学での「アメリカ文学とアメリカ語」(American Literature and the American Language) という講演の冒頭において、自分の子供時代に言及して、すでに亡くなっていたがこの祖父がたてていた一種の家訓、つまり教会と市と大学、具体的にいえば、ユニテリアン教会とセント・ルイス市とワシントン大学への献身という、一種独特な雰囲気の中に育てられたことをのべ、「いかなる子供にしろ、このような制度を尊敬するように育てられるということは、その子の生涯の第一歩としては大変いいことだと思う」と言っている。また、セント・ルイスに言及して、「私はボストンやニューヨークやロンドンでなくて、実際にここに生まれたことを幸運だったと思っている」とも言っている。のちに展開される、文化の伝達のための単位としての家族論にも、或いは、文化の正常な維持のためには出来るだけ単一な地域構造をもつことが望ましいという考え方にも、彼が約一七年間すごしたこのセント・ルイスでの生活がある程度反映していることは想像できる。私自身がエリオットから聞いたこと

るでは、彼は宗教的にはユニテリアンとして育てられ、そして正統な信仰に入るためには「改宗」という経験を重ねなければならなかった、という。改宗という言葉は不用意に発せられる言葉ではない。私自身が仏教から改宗した人間でなく、ルター派の家庭に生まれたのだ、ということに対するエリオットの反応とともに、そのときの彼の態度は今でもあざやかに私の印象に残っている。私がここで強調しておきたいことは、彼の生成と展開に深く関係している幼少ののりの状況、或いは精神風土が、のちの彼の人間と思想と芸術に深くつながっていることは勿論のことだが、このつながりは、肯定・否定いずれにしろ複雑で深刻なものであったということである。

ニュー・イングランド

彼の家系は、もともとボストンを中心とするニュー・イングランドの出であることは重要な意味をもっている。少年時代から夏の休暇はしばしばマサチューセッツ州の東北部にある岬ケイプ・アン(Cape Ann)と

とくにその小さな町グロスターですごした。祖父も両親も、エリオット家がニュー・イングランドに由緒深い家系であることを誇りとして常に子供たちをそこへつれていったのである。この地方の海岸の風景、磯の香り、潮騒の音、等々、われわれが彼の詩の中でしばしば出あい、疼くような感じをもつて意識するのはまさにこのような海の姿である。「ザ・ドライ・サルヴェイジェズ」も、ケイプ・アンの沖合に散在する小さな島の群れであることは今日周知のとおりである。『四つの四重奏』に出てくる木陰で笑いさざめく子供の笑い声や総じて海のさまざまな姿、また「マリナー」(Marina)のあの海の情景、——それらはなんらかの形でかわききった死の様相をこえて再生の、或いは時間的制約の彼方に脱出しようとする時間を超えたものの契機を含むものであるが、いずれもほとんど例外なくこのマサチューセッツの海の背景なしには考えられないものである。このニュー・イングランドは歴史的には古いイングランドと結びついていることはいうまでもない。エリオット家の初代アンドルー・エリオット(Andrew Eliot, 1627-1704)は一七世紀にイング

ランドのデヴォンシャーのイースト・コウカー (East Coker) からアメリカに移住してきた敬虔な商人であった。このイースト・コウカーが『四つの四重奏』の第二編の題名になっており、「わが始めにはわが終りあり」という言葉で初まり、「わが終りにはわが始めあり」という言葉で終わっていることはいろんな意味をわれわれに提示している。題名が自分の祖先の発祥の地を示しており、今やイギリス人として、またイギリス国教会(聖公会)の忠実なる一員として自分の存在の意味を追求している彼自身の一つの姿勢がそこに感得されるのである。

一九〇六年、彼はハーヴァード大学に入学した。以後一九一四年ドイツに向かって留学の途にのぼるまで彼の生涯はこの大学を中心として展開していった。エリオット家とハーヴァード大学との関係は特別なものであったことは、この一家に関係のあるいろんな人々がかつて、総長その他の要職についていたことからも察することができる。一九〇六年から九年まで彼はB・Aコース、一〇年にはM・Aをとり、さらに一四年まで引きつづき学生生活をおくり、いろんな意味で実り

豊かな時期をすごした。ハワース (Herbert Howarth) はその近著『T・S・エリオットをめぐる人物像についての覚え書』(Notes on Some Figures Behind T. S. Eliot, 1964) において、当時のハーヴァード大学の知的雰囲気、教授陣、文学的状况などについて実にくわしい報告を記している。人格と思索と詩的才能のはぐくまれてゆく青年時代に、彼がこの大学のあたえうるあらゆる条件を充分に利用し、自分というものを育成していった過程を、われわれはこの著の中に読みとることができる。ただ、円熟した時期にはつきりした形で表現されてくるいろんな思想や芸術的な衝動の最初の重要な触発を、この時代の大学生活とどう結びつけるかは一つの問題だろうと私は思う。周知のようにエリオットの生涯には恋愛事件とかその他の生々しいといえるような事件はない。散文的といえればこれくらい散文的な生涯もなかりうと思う。しかし、彼の作品の示すマッシヴな重量感の背後には、平凡な日常経験の中につみかさねられていった思考と感動の強さが存在することを私は感ずるのである。若き日に、教室で、或いは懇談、著書の中で得たある種の知識なり感動が

彼の内面形成に作用したことは当然考えうる。ある教授の著書のある主張が、のちのエリオットの主張と非常に類似していたというようなことは、そのこと自体は必ずしも重要ではなく、その扱ひ方は注意を要するということを私は言っているのである。

当時の、つまり二〇世紀初めの頃のハーヴァードの知的雰囲気がどんなものであったかは、哲学関係のジエイムズ (William James) やサンタヤーナ (George Santayana) やロイス (Josiah Royce)、文学関係のバビント (Irving Babbitt) やキットリッジ (G. I. Kittredge) の名をあげることによってほぼ見当がつく。それは「黄金時代」(ハワース前出書) だったといわれる。わが国の学部学生に当たる時代のエリオットは古典文学、英文学などの一般的な教養科目の勉強をしたが、大学院学生 (graduate student) 時代になると、形而上学、論理学、心理学、それにインド哲学など、主として哲学的な問題の研究に興味を見出している。

このハーヴァード時代のエリオットの内面をどうとらえたいのか、私は困難を覚える。一方では文学、とくに詩に対する強い関心、そして他方では哲

学、そしてそれは仏教的な形而上学までも含むものであったが、とにかく哲学への強い関心がある。もうこの頃になると彼は詩作をはじめている。その後ずっと続けられ彼の本質となった詩人としての彼の感受性と、彼の評論、とくに社会・文化に関する、「定義」への意図をつねに示してゆく評論のもつ冷静な論理的明晰性と、この二つのものの乖離^{かみり}がかつて指摘されたことをわれわれは知っている。彼が、たとえば、普通の人間は「恋をしたり、スピノザを読んだりするが、この二つの経験は互いになんの関係もなく、或いはタイプライターの音、料理の香となんの関係もない。しかし、詩人の心の中ではこれらの経験はつねに新しい統一体を形づくってゆくのである」とのちに言ったように、いわゆる「感受性の崩壊」(dissociation of sensibility) に対する感受性の統一性を主張したことを、今、ここで想起するのも無意味ではなからう。彼の「感受性」は感動的なものと知的な思考との統一されたものとして次第にはっきり定義づけられてゆくのである。そして、そのような意味で、たんに論理として定義づけられたものとしてでなく、明確に作品とし

て具体化されたのは、じつに『四つの四重奏』においてであつたと私は思う。このような統一体(wholes)への志向の初めての段階として、彼の精神のハーヴァードでの形成を考えることが可能だと思われる。

詩と哲学の関係とは別に、もう一つわれわれの注目をひくことがある。それは、エリオットの意識の空間的移動ともいえる問題である。これはサンタヤーナやバビットなどの教授陣を擁していたハーヴァードの知的な姿勢ともかなり密接に結びついている。哲学でも詩でも本来そうあるべきものではあるが、ダンテやゲーテやルクレティウスまでも対象とする詩人的な哲学者サンタヤーナにしろ、或いはルソーを扱うバビットにしろ、総じてこの大学の教授たちの関心が強くヨーロッパ的な精神風土というコンテキストにおいてそれぞれの問題を追求していたことが、次第にエリオットの内面で動きつつあったある動きにある種の作用をあたえたことは想像できる。ハーヴァードの所在地マサチューセッツ州ケンブリッジ(Cambridge)、このボストン郊外の大学町で生活したことのある人はすぐ感じるはずだが、ここにはピューリタンのニュー・イ

ングランドの雰囲気とともに、イングランドをも含めてヨーロッパの伝統的な文化に対する特別な感情、一種の愛情みたいなものが存在する。若き大学生エリオットが、このヨーロッパから遠いニュー・イングランドにあって、一つの擬態、一つのプリテンションとしてヨーロッパ的な面を^{ペルソナ}つけようとしていた、と私は推察する。なお、彼の東洋、とくにインド哲学や仏教への関心がよびさまされたことは、アメリカにおける東洋学の一つの拠点であつたこの大学の影響に負うところであることはいうまでもない。『荒地』の第三部「劫火の説教」(The Fire Sermon)の中の「燃える」という言葉、仏陀の『燃焼の法語』からの言葉を初めとして、彼の心の中でインド的なものが永い間、おそらく最後まで力強い位置を占めていたことは、彼の作品、評論が雄弁に物語っている。ただ、インド哲学の研究が結局自分の西欧人としてのものの感じ方、考え方を忘れてしまわない限り充分なものでないという結論に達したことは、非常に示唆的である。私のいう彼の空間意識は、西欧的世界の限界の線に沿うてたちどまるのである。非西欧的世界は別個の時間的制約、別

個の伝統をもったものとして彼の前に横たわる。しかもなお、この対立的な二つの世界をつながなければならぬとすれば、それは、人間にとって普遍的なロゴスによってでなければならぬ。そのような点に、彼の晩年の注目すべき「賢者としてのゲーテ」(Goethe as the Sage, 1955)と、講演の中で展開されようとした「知恵」(“wisdom”)の意味がある。

ブルーフロック氏の世界

ハーヴァード時代のエリオットの生活についてはまだ語るべきことは多い。『ハーヴァード・アドヴォケイト』(Harvard Advocate)という一種の校友会雑誌に彼は寄稿をし、一九〇九年には編集員になった。一九一〇年には一応M・Aをとり、同年から翌年(一九一一年)にかけてパリのソルボンヌ大学に留学してフランス文学と哲学とを勉強している。帰国後再びハーヴァードにもどり、哲学の研究に没頭し、一九一二年から翌年にかけて哲学科の助手となり、このままゆけば、われわれは詩人エリオットのかわりに哲学者エリ

オットの出現をみることになったかもしれないのである。フランスから帰国後、彼の哲学的関心は主としてブラッドリー(F. H. Bradley)に向けられていた。これがのちに(一九一六年)、『ブラッドリーの哲学における経験と知識の対象』(Experience and the Objects of Knowledge in the Philosophy of F. H. Bradley)という博士論文となって結実した(ただし、彼は口述試験をうけなかったためこれによって博士号はえていない。またこの論文は一九六四年に出版された)。

このような平凡といえば平凡な、余り目立たない青年エリオットの表面の動きの裏側に、われわれはやがてイギリスとアメリカの詩壇に大きな衝撃をあたえる潜在的な力がゆるやかにたくわえられつつあったことを見逃しえない。彼もまた多くの当時のイギリス、アメリカの若い詩人の卵たちと同じように、バイロンとかシェリーのような浪漫派の詩人たちによって詩的感動を触発された。しかし、エリオットが一九〇八年に世紀末詩人の一人シモンズ(Arthur Symonds)の『文学における象徴派運動』(The Symbolist Movement in Literature, 1899)を読んだことは英米の「現代詩」

にとり、そしてそれ以後の詩の展開に対してある決定的な作用を及ぼしたのである。のち(一九三〇年に、当時彼が主筆をしていた『クライティリーオン』(Crittérion)誌上でクエネル(Peter Quennell)の『ボードレールと象徴派』(Baudelaire and the Symbolists, 1929)をみずから批評した文章の中で、シモンズの前記の著書に讃辞を呈し、自分はこの著書を読まなかったら、ラフォオルグ(Jules Laforgue)もランボー(Arthur Rimbaud)もその名を知らなかったであろうし、ヴェルレーヌ(Paul Verlaine)もコルビエール(Tristan Corbière)も読むことはなかったであろうとい、「そんなわけで、このシモンズの本は私の人生のコースに影響をあたえたものの一冊なのである」と言っている。これはいつも控え目な表現をする彼としては大変強い表現である。

シモンズ、ラフォオルグ、エリオット、——こういった線上に一人の人物ブルーフロック(Prufrock)氏の姿が現われる。ブルーフロック氏はやがてつづいて現われるゲロンチョン(Gerontion)やタイリーシアス(Tiresias)やスウィーニー(Sweeney)とつた数々

の人物につながる、劇的な人物である。ある意味で、エリオットの世界を一つの劇とみなすことができるならば、これらの人物はそれぞれの段階において現われる登場人物(dramatis personae)とさえいうこともできよう。これらの人物と作者エリオットの関係はかなり繊細な問題を提出する。登場人物が作者によって描かれたという意味では、それらは作者の分身であろうが、一つの客観的な状況になげ出されているという意味からは、それらは作者の主^{パーソナリティ}体からは離れているといえる。全般的な展開としていえることは、初期の人物は作者から離れており、後期の作品(詩)の「私」は作者に密着した人物^{パーソナ}ということができる。後期の「私」が登場する、少なくとも、それが次第にはっきりした存在を作品にみせかけるとともに、ブルーフロック氏やその系列の人物像は影をうすくしてゆき、それと同時に、エリオットにおけるラフォオルグ的なもの、都会的な生活を背景としたシニカルな、屈折の多い、デカダシな情調と表現も次第に影をひそめてゆくのである。彼の在学中、注目すべき作品もかなり書かれているが、「ある婦人の肖像」(Portrait of a Lady)は一九

一〇年に書かれ、「J・アルフレッド・ブルーフロックの恋歌」(The Love Song of J. Alfred Prufrock)はその年から翌年にかけて、つまり彼がパリ留学後ミュンヘンへまわったとき、その地において完成されている。二一歳から二二歳にかけてのまだ若いエリオットのこれらの詩の背景は、まさしくケンブリッジ(マサチューセッツ州)であり、ボストンであると思う。しかもなお、それらの人物、状況、街は、いわばヨーロッパの象徴詩的な人物や状況や都会を下敷きにして描かれている。彼は若いにもかかわらず、いや、むしろ若いゆえに、中年の男や女の心から滲みでる生の不毛、生の倦怠を、自分の外に設定されたある状況をとおして描いている。そして、彼自身は、哲学を、ブラッドリーなどの哲学を読み、エリザベス朝の詩人たちを読みつづける。

ロンドンにて

一九一四年、従来のハーヴァードの哲学の教授たちががそうであったように、彼もまた留学費をあたえられ

てドイツにわたった。将来、母校の教壇にたつことは当然予想されていたのである。しかし、結局、彼が再び母校に帰ったのは、約一八年後、一九三二年から翌年にかけて詩学教授として招かれて講演をするためであった。その時の講演が『詩の効用と批評の効用』(The Use of Poetry and the Use of Criticism, 1933)として公刊されたのである。とにかく、彼はドイツのマルブルクにいったが、第一次大戦の勃発のために滞在をきりあげ、オクスフォード大学に転じ、マートン・コレッジ(Merton College)でスピノザやアリストテレスの研究者として有名なジョアキム(H. H. Joachim)教授についた。しかし、やがて(一九一四年の末か?)彼はロンドンに定住し、以後その死にいたるまで、時おりの海外への講演旅行は別として、この地を離れることはなかった。

この数年の間に、彼は哲学者から詩人へと、自分の社会的職能を果たす身分の決定をゆるやかにしつつりと見定めていったようである。ブラッドリーの研究は依然としてつづけられ、留学を可能ならしめてくれたハーヴァードへの恩義の点からも、とにかく博士論文